

V 実践事例

1 表現化に視点をあてた小学部の指導

表現化に視点をあてた時計の指導 —小学部高学年の実践を通して—

(1) 小学部における表現化

小学部の子ども達は、自分の意志や感情を表現する能力に劣る。また、日常生活での言語表現も十分にできないことが多い。しかし、身体的な表現によって意志や感情の伝達が行なわれる場合が多く見られる。言語が未発達な段階では身体的な表現が主として行なわれるように、このような身体表現は次の段階へ向けての重要な表現方法である。また、言語を通して自分の意志や感情を相手によく分かるように伝えるという点でも子ども達の表現活動は不十分である。これは、表現するための能力が充分身につけていないことと同時に表現の方法が未熟なためである。そこで、小学部のめざす表現活動はこの段階を大切にしながら高次の表現活動へと導びいていこうとしているのである。

学習や生活場面で表現化をめざすにあたって、我々はたえず子ども達の表現活動に目を向けその表現活動が活発に行なわれるように配慮しなければならない。積極的な表現活動がなされるためには子ども達の全生活を通しての指導が行なわれなければならないが、ここでは学習場面を通して表現能力の育成をめざしている。その学習の場では学習の組み方や配慮の仕方が表現能力の育成に大いにかかわってくるといえる。また、表現能力が学習の場からさらに身近な生活の中でどのように生かして使うかというところまで具体的に指導していかなければならない。子ども達は具体的な生活に含まれる内容を表現化と有機的に結びつけた学習の中で表現能力を獲得し、また生活に生かして使う能力を培うことによって自ら進んで表現活動ができるようになってくると考える。

小学部の各学年で表現化をめざした取り組みが行なわれている。その取り組み方にあたっては子ども達の実態や発達段階が充分考慮されなければならない。低学年では、子ども達の表情や動作を具体的な表現活動の場と結びつけ、機会をとらえてできるだけ確実に表現できるようになることをめざしている。中学年では、身体表現を一步押し進めて動作に言語を結びつけ言語による表現活動が主として行なわれていくようにめざしている。さらに、高学年では、獲得した表現能力を生活の中に積極的に生かして使えるようにめざしている。しかし、各学年のめざすものは独立してあるのではなくそれぞれ関連しあっている。表現化は小学部の段階だけで達成されるものではない。より高度な表現活動を行なうために、その基礎的な知識、技能の獲得、態度の育成をめざしているのである。

(2) 実践事例

① 「時計」の指導に当って

時計は我々の日常生活に重要な役割を果たしている。時計を読むことができれば、きまりや約束を守ることに役立ち生活にけじめをつけることにつながる。反対に時計を読むことができないならばバスの利用、登校、下校などに支障をきたすことになる。知恵遅れの子ども達にきまり良い生活を送らせることは非常に大切なことであり、そのためにも時計が読めることの意義は大きい。

高学年の子ども達で、時計を分単位まで正しく読むことができる者が2名、十分単位が少し読める者が3名、全く時計を読むことができない者が1名いる。日常生活において、時計を正確に読むことができる2名を含めて子ども達全員は自ら進んで時計に従って行動することはほとんどない。このような実態において、子ども達の時計の指導はまず具体的生活と結びつけて時計に関心を持つ、時計を見るということから出発していかなければならない。そして、子どもに時計の必要感をいだかせることが重要である。

時計の学習は単元を通しての学習で終わるものではない。日常の生活場面で継続して指導していき計に対する興味・関心を持たせるとともに、単元を通して指導することにより一層興味・関心を高めていくものである。

② 表現化に視点を当てた「時計」の指導

時計の学習は教科として指導されることが多い。学習の目標も「何時何分が読める。」という点に置かれ、その目標が達成されればよいと考えがちである。知恵遅れの子ども達の教育では、学習で獲得した能力もそのままでは子ども達が自ら進んでその能力を生活の中で生かして使うことは困難である。表現化に視点を当てた「時計」の指導を行なうことは、教科としての目標を達成してその上で生活の中に獲得した能力を進んで生かして使う段階まで深めていくことを示している。教科の目標としての何時何分が読めるようになったら、何時にどこに集まろう、掃除を始めようといった活動を学習の中に組み立てていくことが必要となる。

子ども達が時計を読むことができてもなかなか生活化できないのは、生活への生かし方がよく分からないことによる場合が多い。教師は、子ども達が獲得した能力をそれぞれの実態に合わせて生活化できるように導びていかなければならない。表現能力を生活化する場を学習として組み立て、子ども達が進んで生活の中で時計を生かして使えることを今まで以上に強調していかなければならない。

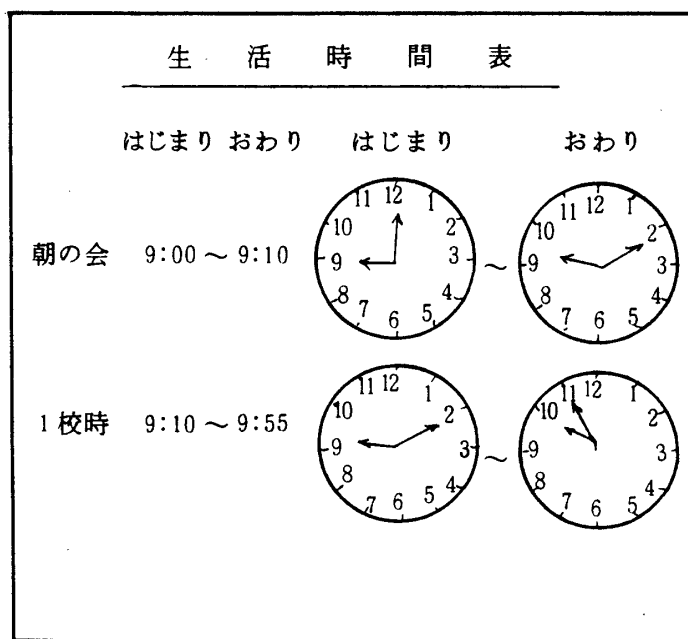
③ 指導の経過

知恵遅れの子ども達の指導では、子ども達が意欲的に学習に取り組むかが目標の達成に大

きなウェイトを占める。時計の学習で、この点をふまえながら子ども達にどのようにして時計に対する興味、関心また必要感を持たせるかをたえず意識しながら指導を進めていった。子ども達に時計に対する興味、関心を高める活動として、時の記念日について話し合ったり、時計屋さんに見学に行き時計についての話を聞いたりいろいろな種類の時計を見たりした。また、学習で使用する模型の時計作りもした。時計屋さんの見学で、子ども達は今まで見たことのないめずらしい時計に注目し手でさわったり音を聞いて楽しんでいる。模型の時計作りでも、子ども達はカラフルな時計を作って楽しんでいる。我々がめざすものはこの段階にとどまるものではなく、日常の生活と時計を結び付けてたえず時間を意識し、そして生活に役立たせるというところまで導びいていく必要がある。

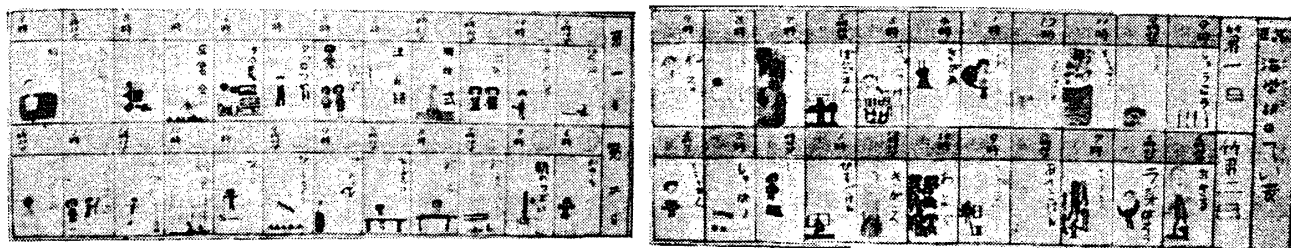
高学年の子ども達の能力差は大きく、画一的な指導は困難である。個々の実態に応じた目標を設定して指導していかなければならない。この单元では子ども達をその能力に応じて3つのグループに分けて指導してきた。10までの数字がやっと読める子どもは時計の針の動きに関心を持たせながら何時が読める。10分単位が少し読める段階の子どもには確実に読めることをめざして指導してきた。また、分単位まで読める子どもは60分間までの計算ができることをめざし、かつ学習場面で指導的な役割りを持たせ子ども達とのかかわり合いの中で自分の知っていることを他の子ども達に教えるという形で表現させていった。また、知恵遅れの子どもの指導はあくまでもスモールステップで段階をふんで指導していかなければならない。針の示している時刻が読めるだけでなく、指示された時刻を模型の時計で示すことができることにより時計を読む能力がより確実にになると考える。こうした活動をそれぞれのステップで行ない生活の中で生かして使えることをめざして、日常の生活の中から時間の要素を取り出して学習として組み立て実際に時計を読んで行動する場面を強調して指導した。具体的には、生活時間表を教材化して学習を進めていった。

この生活時間表は子ども達が学校生活をする上で非常に密接なものであり、また実際に行動化する場面を多く含んでいる。何時あるいは何時何十分を読む学習もただ時刻で示してあるものを読むだけでなく、生活時間表との関連で進めてきた。時刻を正しく読むことができない子ども達も、右図のように時刻を示した表と時計を見比べることによって行動できるようにした。我々は何か次の行動を起こす時あるいは起こそうという意図を持って時計を見る。



学習場面でも単に指示された時刻を読むことよりも何時何分からは何をしなければならないかという目的意識をもって時計を見て、生活時間表と結びつけていった。時計を読むことができる子どもは、時計と生活時間表を結び付けて次の行動に移る準備をしようとする意識ができた。他の子ども達は時計と図に示された針の形によって時刻をとらえて少しずつ行動化できるようになってきた。小さな段階をふみつつも、たえず生活と結び付いた学習をして再び生活の中に帰っていく学習の組み立てに子ども達が少しずつではあるが時計の生かし方を理解しはじめてきたのである。

また、この単元に先立って宿泊学習を行なった。宿泊学習では子ども達が自分で時計やしおり、日程表を見て行動しなければならない。そのために、子ども達が少しでも自主的に行動に移ることができるように写真のように時刻を示した日程表をつくる学習をし、時計に対する意識を高めてい



った。宿泊学習に時計を持っていき、子ども達がいつでも時計を見てしおりの日程や日程表と合わせて今は何をやる時間か、何時何分からは何をやるのかが分かるように配慮した。また、この時計の学習のすぐ後に臨海学校が行なわれた。時計の学習は単元を通して指導したからといって身に付くとは言いえない。生活の中で生かして使う段階まで導びいていくためには機会をとらえてたえず指導していかなければならない。この臨海学校でも宿泊学習と同じように単元を通して学習してきたことをさらに深めていくためにしおりの日程や日程表づくりを通して本番に向かった。臨海学校でT・H児を時計を見て「12時になったら弁当だ」と言った。我々はこういう子どもの表現を待っているのである。

④ 考 察

時計は毎日の生活から切り離すことができないものである。子ども達は帰りのバスに遅れてはいけないという危機感を持っているが、そのことが時計と結びつかない子もあった。その子たちも自分なりに何とか時計を見ようとしている。

単元を通して指導している時は気分も高なり時計も見ようとする。しかし、普段の生活では時計を見て行動することはまだ少ない。そのことから、大切なのは時計を毎日の生活にどう生かすかということである。今後、時計の必要性を生活の中で意識づけ、自主的に活用できるようにさらに実践していかなければならないと考えている。